

学生と教員によるロールシャッハ研究会の展開
—やる気を起こさせる「器」としての研究会活動—

福井 義一*

**Development of a Rorschach Study Group by Students
and a Faculty Member:
Study Group Activity for Facilitating Motivation**

Yoshikazu Fukui*

Abstract

Three years of activities of a Rorschach study group organized by the author are reviewed and also whether it affected relationships between students and facilitated active and independent learning.

Initially the faculty member took the initiative, but over the three years the group transformed itself into a space where students could function independently and this was accompanied by an increase in the students' awareness of their studies and future courses. This appeared in ways such as: development of friendships on campus or in graduation study, improved graduation study, collaborative study with the faculty member or continuing to graduate school in order to enter a profession. The structure of the study group activity is examined from the perspectives of education, clinic and research which took place in conjunction with the formation of interpersonal relationships.

キーワード

ロールシャッハ・テスト、動機づけ、研究会、人間関係づくり

Key words

Rorschach test, motivation, study group, building human relations

*ふくい よしかず：大阪国際大学人間科学部非常勤講師（2006.10.6 受理）

はじめに

変化する大学生気質とその対応

近年、大学生から元気がなくなったという声をよく耳にする。与えられた課題はこなしてくるが、自分たちから積極的に動こうとしない学生も増えている実感がある。また、学生同士のつながりも希薄であり、友人関係はもちろんのこと、先輩や後輩との関係に触れる機会がない学生も多い。最近では、こうした傾向を「ふれあい恐怖」(福井, 2003; 西村, 2001; 岡田, 2002) という観点から考察する研究も見られる。これに関して、栗原(1989)は、現代青年の友人関係の特徴として、自他を傷つけず、友人を自分の内面に入らせず、群れていることによって安心するといった点を挙げている。さらに、山田(1989)も、雑談や会食などの対人関係が深まるような場面に恐怖を感じて、表面的な関わりにとどまろうとする学生の出現について述べている。小塩(2004)は、これらの現象を「自己愛」傾向の観点から捉えている。学生相談の立場からも、精神発達の未熟さや偏りが見受けられると報告されており(喜田・高木, 2001)、今後もこのような傾向は持続もしくは加速すると見られている。

このような学生像の変化を受けて、教員や大学側も様々な手だてを講じる必要があり、本学でも心理コミュニケーション学科において、学生相互間の信頼感を高めるという観点から、グループワークの手法を用いた人間関係作りを試みて、短期的な介入にもかかわらず一定の成果を得た(石井・谷口・加藤・福井・柏尾・粕井・青野・森上・小牧, 2006)。近年、教育現場においては、構成的グループエンカウンターという技法が導入されつつあり、子どもたちの人間関係作りにも効果をあげている。筆者も公立中学校と高等学校において学級に構成的グループエンカウンターを導入し、その効果を測定した。その結果、子どもたちの人間関係における心理的距離が減少し(福井・三輪, 2000; 福井, 2000; 福井, 2001)、学級雰囲気も肯定的に変化した(福井, 2004)。時代的・社会的問題であれ、個人的・心理的問題であれ、学生の間関係が希薄な現代にあっては、このように学生が生活をともにする場を人為的に設定し、交流を促進することが必要となってくる。

筆者は、このような現状を鑑みて、学生が日常的に密な関わりをする場を意図的に設定し、長期にわたって学生の縦横のつながりを強化し、自主的で積極的な活動を展開させ、さらに集団の中で個人が成長することを目指してロールシャッハ・テストを学ぶ研究会を立ち上げた。表面的には、多様な領域にわたる心理学の中でも臨床心理学や心理臨床学に興味を持つ学生に、ロールシャッハ・テストという切り口から専門的な技能や知識を教える場としてあつらえ、それと並行して、研究や臨床活動ともリンクする中で、学生相互間の人間関係に支えられる形で、学生のやる気(動機づけ)を引き出すしかけを行った。学問的な興味や関心といった動機づけは、日々の人間関係の安定に支えられてこそ展開すると予想されるので、生活をともにする場として週に一度の研究会活動は適度であると思われた。

ロールシャッハ・テスト

ロールシャッハ・テストとは、スイスの精神科医Rorschach H. (1884-1992) によって考案された心理検査の一技法であり、臨床現場でも幅広く用いられている。本検査は心理検査の中でも人格検査として扱われ、投影法と言われている。投影法においては、テストされる側が望ましい答えを予想できず、結果を意識的にコントロールすることが困難である。また、意識的な内容よりも、無意識的内容や体験の様式に焦点を当てることができる。具体的には、インク・プロットが印刷された10枚の図版を見せて何に見えるかを問い、得られた答えから記号化を行い、その記号や体験様式からパーソナリティを解釈する。

研究会で扱う題材としてロールシャッハ・テストを選んだ理由は、学生にとっても、魅力的で興味を惹かれる心理検査であることと、筆者自身、ロールシャッハ・テストについて10年近い経験を有し、実際の臨床現場でも活用していたため、研究会で取り上げるのに適切であると思われたからであった。なお、記号化や解釈の方法には、諸派が存在するが、筆者が最も馴染んでおり、分析的な深い解釈が可能であるので、基本的にはKlopfer法を用いた (Klopfer, Ainsworth, Klopfer, & Holt, 1954; Klopfer & Davidson, 1962)。また、欧米と日本では標準化データが異なるので、必要に応じてKlopfer法を基本に日本で発展した片口法や、Klopfer法について書かれた他の日本人研究者の著作を参考にした (片口, 1987; 高橋・北村, 1981; 村上・村上, 1988; 村上・村上, 1991)。

本研究の目的

ロールシャッハ研究会を立ち上げた目的は、研究会活動に取り組む中で、①教員と学生間および学生相互間の交流を促進することで密な人間関係を築き、②運営を学生に任せることによって自主性や積極性を養い、③高度に専門的な内容を学ぶことで学問に対する興味や関心を育て、④日々の研究会活動以外の場でも「やる気」を持って学生生活を送り、⑤社会に出てからも通用するよう個人として成長することであった。本研究では、ロールシャッハ研究会の3年間の歴史を振り返り、上述の目的がどの程度達成されたかを検討する。

研究会活動の実際

2003年度の活動

本研究会は、筆者が大阪国際大学に赴任した2003年度の後期から活動を開始した。当初は、筆者がリーダーシップをとって引っ張る形でスタートした。出身学科の内訳は、心理コミュニケーション学科から5名、国際コミュニケーション学科から1名、人間健康科学科から1名の合計7名で、学年の内訳は、2回生が2名、3回生が4名、4回生が1名であった。後にオブザーバー参加で人間健康科学科の4回生1名が加わった。性別は男性が1名で残りは全員女性であった。

研究会は毎週1回のペースで、正規の5講時目が終わって18時頃から21時までをめどに筆者の研究室で行われた。本格的に研究会が開講する前に、各学生は交代で検査を実施して、自分の検査データを所持していた。最初は、ロールシャッハ・テストの概要と記号化

の解説に数ヶ月を費やした。ロールシャッハ・テストは一般的に習得するのが困難であるが、その理由の一つに、記号化のルールが多岐にわたり複雑であることが挙げられる。そのため、学生の興味を持続させるように、各記号の意味を具体的に説明し、身近な現象に引きつけて説明したり、クイズ形式を用いたり工夫した。しかし、専門的な内容であるので、必要以上にレベルを落とさないように配慮し、分からないままでも構わないことを学生に伝えた。分かる部分と分からない部分の適度なバランスが、好奇心や探求心を呼び起こすからである。一通り、記号化に関する知識を得たら、次に研究会のメンバーのデータを順番に記号化し、解釈する練習をした。反応数が非常に少ない学生から、非常に多い学生までいたので、一人の学生の解釈にかかる時間はかなり異なっていた。

開催期間中は、学生同士の親睦を深めるために、打ち上げなども行い、後期修了後は和歌山で一泊二日の合宿を行った。研究会は課外活動であるから、講義とは違って準備や片付けなど、学生が自主的にすることを義務づけて、次年度の新入会員に対する教育は、先に学んだメンバーが責任を持って行う（「教えられたら、教え返す」）ことを取り決めており、合宿の企画も学生に半ば任せる形であった。また、次年度の新入会員の勧誘や、教育の詳細も学生に任せて行った。

また、筆者の研究室には、古今東西を問わずロールシャッハ・テストの研究書を揃え、いつでも学生が閲覧できる状態にした。収集した専門書はその後3年間で150冊を数えた。

2004年度の活動

2004年度は、筆者のゼミ生（心理コミュニケーション学科）を中心にかかなりの人数が研究会に加わり、20人を超えた。そのため、前期は記号化と解釈の練習をする定例の研究会と、新会員に教える勉強会と、週に2回開催された。新会員への教育は、分担して行い、そちらは学生に任せることによって、自ら主体的に学ぶ努力を促した。学生たちは教えることによって、さらに知識を確実なものにすることができたことが、定例の研究会で彼らに接している中で分かった。

前期が修了し、新会員の記号化と解釈の学習が一通り終わったところで、親睦を深めるためと、実際の事例を通して記号化を練習し、理解を定着させることを目的に夏合宿を実施した。この運営はほぼ学生に任せ、幹事の学生は四苦八苦しながらも滋賀県で一泊二日の日程で合宿をすることができた。この際、筆者のかつての研究会仲間を外部講師として招き、実際の心理臨床家に触れる機会を得た。

後期は多人数であったこともあり、定例の研究会は2グループに分け、隔週で開催した。また、若干名が後期からの参加を希望したので、前期に学んだもののうち数人が、後期新会員の教育を担当した。すでに筆者の研究室では入り切らなくなっており、この時期になると、学生が自ら研究会の部屋を借りる手続きをし、時間になると筆者がいなくても始めるようになった。後期になると筆者は少し研究会活動から距離を置き、記号化や解釈の重要なポイントだけは顔を出すようにした。学生が自らの興味でロールシャッハ・テストを通して心理学を探究し、自分たちで研究会を運営するように方向付けるためであった。

後期修了後は、学生の計画と運営で沖縄へ二泊三日の合宿を敢行した。この際も、筆者

の知人で臨床心理士を目指す大学院生を外部アシスタントとして招き、心理臨床家を目指す学生とふれあう機会を作った。現地でも、筆者の知人で長年心理臨床の現場で勤務する者との交流の機会を設けた。

2005年度の活動

当該年度も10人以上の新入会員が加わった。前期は前年度と同様に、定例研究会と並行して新入会員への教育が学生たちによって行われた。研究会のメンバーで卒業研究にロールシャッハ・テストを用いることを選択した者が3名も出てきたのは、筆者自身うれしい誤算であった。それぞれが、自分自身のロールシャッハ・テストを解釈した経験から、自分の心理的成長につながるようなテーマを決めて研究を進めた。他のゼミ生もロールシャッハ研究会での経験から、自分なりに深めることのできる題材を卒業研究のテーマとして選ぶことができた。夏には半ば定例の行事として、合宿を淡路島において一泊二日で行った。

後期になると、学生が自ら積極的に学習を進め、一人の記号化と解釈を学生が進めた後の最終日だけ筆者は顔を出して、解釈の重要なポイントを解説した。後期は、ロールシャッハ研究会で学んだ筆者のゼミ生たちが大変熱心に卒業研究に取り組んだ。学生達が専門的な内容に興味や関心を持って追求し、相互に助け合いながら、連日深夜に至るまで卒業研究に打ち込むことができたのは、ロールシャッハ研究会での活動を通して醸成されたゼミの雰囲気や学ぶ姿勢に起因すると思われた。

結果、3名がロールシャッハ・テストを用いた研究を行い、1名は同じ投影的技法である箱庭療法を用いた研究を行い、残りの者も非常に高い水準の卒業研究を行うことができた。これらのうち、筆者と共同研究という形で進めた分については、学生の了解を得た上で、2006年度にすでに複数の学会で発表されている（福井・福井, 2006a; 福井・福井, 2006b; 福井・森津, 2006）。さらに、ロールシャッハ・テストを用いて卒業研究を行ったゼミ生の一人は、将来心理臨床の領域で働くことを希望しており、臨床心理士養成指定大学院に合格した。これも、仲間を支えられながら専門的な領域に普段からふれて、高度な研究をし、動機づけを持続することができたからであろう。

さらに、卒業研究以外でも研究会としての専門的活動が生まれてきた。それが、中国人留学生のロールシャッハ反応の研究である。この研究は、ロールシャッハ研究会の活動とリンクしており、研究会のメンバーである学生が、ロールシャッハ・テストを実施する実習を兼ねて、筆者と共同研究者の監督の下に計画され実施された。

筆者が本学を離れることになったため、年度末には次年度以降のオリエンテーションも兼ねて、徳島県で二泊二日の合宿を行い、3年間の筆者のロールシャッハ研究会活動は幕を閉じた。その場で、学生が今後の研究会をどうして行きたいかを話し合い、ロールシャッハ・テストに限らず幅広く学べる場にしたい、また大学に認めてもらえるように同好会や部活動に昇格させたいとの申し出があった。現在では、臨床心理学を学ぶ同好会として再出発し、週に一度の研究会活動を継続している。筆者もセミナー指導のために、週に一度本学で講義を担当しており、終了後にボランティアで研究会に参加している。2006年度

も、研究会の中心メンバーでもあるゼミ生の一人が、臨床心理士養成指定大学院にすでに合格しており、ロールシャッハ研究会を中心とした「やる気」を引き出す指導体制が継続して機能していることを示している。

考察

3年間に及ぶロールシャッハ研究会の活動を概観した上で、この活動が学生たちにとってどのような機能を果たしていたのかについて考察したい。図1に、人間関係形成の場として機能する研究会が、3つの側面から成り立っていることを示した。以下にそれぞれの観点から考察を加えたい。筆者の理想は、この3つの側面がそれぞれ等しく機能しながら、学生の人間関係が醸成され、それに支えられて、学生が自主的に動き始め、一人ひとり成長をする場を提供することである。

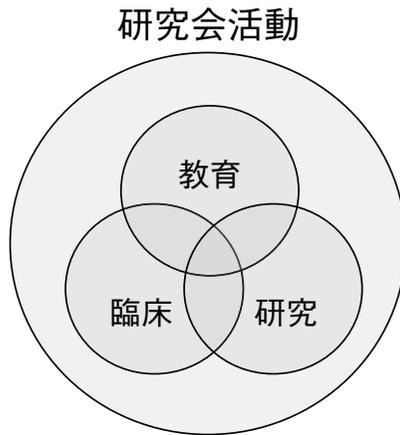


図1 相互的な信頼関係を基礎とした動機づけ醸成の場

人間関係づくりの場としての研究会活動

3年間に及ぶロールシャッハ研究会活動における様々な関わりが、学生の人間関係作りに寄与したように思う。第一に、教員と学生の間、講義やゼミ以外の場面で密なコミュニケーションが得られ、通常の状態では分からない部分まで、お互いに理解し合うことができる。第二に、学生相互間の関わりややり取りが増えることで、学生同士のコミュニケーションが密になり、友人関係や恋人関係への発展も見られたし、何か一つのことを共有する仲間としての意識ができあがっていった。このことは、卒業研究の場面で随所に見られた。例えば、一人が質問紙を作成して配布する際、他のゼミ生は誤字や脱字をチェックし、夜遅くまで残って印刷と製本を手伝い、配布時にも協力して配布・

回収を行った。また、グループで研究を進めたときも、お互いに役割を分担し、何度も話し合いながら、非常に複雑で専門的な研究を進めることができた。

研究会活動には、通常の週に一度の例会を行うだけでも、部屋の確保、ロールシャッハ図版の準備、当日の資料のコピー、会の進行などの仕事がある。誰が何をするか、どのように分担するかなど、常にメンバー同士がコミュニケーションをとらざるを得ない状況にあるため、自然に仲間意識ができていくと思われる。一度できた仲間意識に支えられることで、一人ではできないような高度な研究も、助け合いながら乗り切ることができたと考えられる。

また、学生が相互に自分のロールシャッハ・テストの結果を材料に、記号化や解釈の練習をするので、お互いの内面まで深く知ったかのような気持ちが生じやすい。筆者も解釈の際に、病理やネガティブな面に焦点を当てるのではなく、できるだけ学生のポジティブな面に言及し、お互いが好意的にお互いのことを見られるように工夫した。また、教員側としても、各学生のロールシャッハ・データを見ることで、彼らの内面を詳しく知ることができ、日常の教育や指導にも役立てることができた。

大学生生活におけるこうした人間関係醸成の場としては、従来はクラブ活動や学友会活動、ゼミやアルバイト先の人間関係が相当しており、我々が工夫せずとも、学生達は自ら積極的に新しい人間関係に飛び込み、そこで成長していった。しかし、現在のように密な対人関係を忌避し、一人の世界に閉じこもりがちなる学生達に対しては、我々の側が工夫をして、こうした場を設定する必要があると思われる。

教育の場としての研究会活動

研究会では、ロールシャッハ・テストを相当程度まで教育したが、これも学生の動機づけを高めるのに大きな役割を果たしたと言える。学力の低い学生や、意欲の低い学生を目の前にしたとき、できるだけ分かりやすく、できるだけ簡単に、できるだけ親切に、できるだけいてねいに教えようとする事それ自体は悪いことではない。しかしながら、それだけでは学生達に学問の奥深さや面白さを教えることはできないし、それ以上のことを知りたいという欲求を持たせることもできない。筆者は、ロールシャッハ研究会において意図して専門的な内容を交えて教育を行った。

このような内容を教えても、心理臨床の職業に就かない学生には意味がないと思われるかもしれない。しかし、研究会活動を通して、自発的に学習するようになった者は、それ以外の場でもその力を発揮するだろう。このため、分かる部分と分からない部分のバランスを常にとるように心がけた。分からない部分については、他の心理学の分野とも関連づけながら、応用的な学習や探求への道を示した。そのため、何人かの学生はロールシャッハ・テストそのものに興味を抱き、卒業研究のテーマとして取り組んだし、それ以外の者も、自分が決めたテーマを真摯に追求することができたと思われる。

心理学に興味を持って入学してきた学生に、心理学の全体像が分かるようにするのは容易なことではない。義務教育や高等学校までの科目と異なり、心理学は積み重ね科目ではないし、膨大な応用分野から成り立っているいわば雑多な学問であると言える。その中の

一分野であり、全ての心理学の臨床的応用を含む臨床心理学を教えることには、さらに困難が伴う。そのため、臨床心理学の学習は、総論的ではなく実感を持って理解するには、ある分野を切り口に深めていくしかない。この点で、心理検査は取っ付きやすく、自分や他人のパーソナリティに興味を持つ学生達には格好の入り口である。

初期の興味や関心を入りに、学生達は次第に人間のパーソナリティの奥深さを、それを捉えるための技法であるロールシャッハ・テストの記号化や解釈の複雑さから学ぶことになる。さらに、学問の奥深さを知ることで、人間の奥深さや人生の奥深さにも思いをはせることができる。筆者は、手抜きせずに、臨床現場で働く心理臨床家やそれを目指す大学院生に教えるときと、ほぼ同様の水準で学生に教えてきた。通常、ロールシャッハ・テストは記号化を行った後、量的解釈と質的解釈を行うのだが、量的解釈だけではなく、内容分析や継列分析といった質的分析まで学生ができるようになるのを目的とした。しかしながら、このことは学生にロールシャッハ・テストの技法を身につけてもらうことそれ自体が目的ではなく、前述したように学問の奥深さや人生の奥深さに目を向けてもらうことが本当の目的であった。そして、新しい技能を身につけることで、世界の見え方が変わるという体験をさせることをも意図していた。

臨床の場としての研究会活動

研究会の活動にはもう一つの機能があった。それは臨床の場としての研究会活動である。筆者が目指していたのは、本来は教育の場である大学生活に心理臨床の関係性を持ち込むことではなく、心理臨床的な観点で学生たちを捉えることであった。臨床心理学を志す学生の中には、心理的に問題を抱える者も少なくない。むしろ、だからこそ臨床心理学に関心を持つとも言えるだろう。そのような学生には、木目細かい対応が必要であり、場合によっては心理臨床的な観点から学生をアセスメントすることが必要になる。むしろ心理療法的なアプローチは、研究会活動に馴染まないが、心理査定（アセスメント）の観点を持つことは学生の指導上も役立つだろう。

例えば、筆者はある学生が、研究会の始まる前に、研究室で一冊の本を見ながらある言葉を言ったのを聞いた。それは、一風変わった生き物について触れた一般向けの図鑑であり、彼女は「海の中には、こんなのがいるの？ 気持ちが悪い」と大声で他の学生と話していた。筆者は、この言葉から、彼女がその日から自分のデータをもとに記号化を始めることを、大変不安に思っており、自分の無意識に変なものが潜んでいたらどうしようかと恐れていることに気づいた。そこで筆者は、「そう、海の中だけじゃなくて世界にはまだ見ぬ変わった生き物がたくさんいるんだよ。面白いでしょ？」とリフレームした。自分の心の中を見るのは不安かもしれないけど、どんなものが出てくるか、考えただけでワクワクすると意味を変えて伝え返すことで、不安や恐れを興味や関心の感情に変えるべく配慮した。

このようなやり取りを随所に交えながら、学生たちとやり取りし、特に記号化や解釈のために自分のデータを提供した学生には、彼ら自身にポジティブなメッセージが伝わるように、間接的なメッセージを伝えた。そうすることで、知らず知らずの間に、青年期の発

達課題や、個人の心理的な問題を乗り越えたりやり過ぎたりする援助ができた。この一例については、いずれ紀要において発表する予定である。

このようなやり取りは極めて心理臨床的であり、同時に教育的でもあった。

研究の場としての研究会活動

第三に、研究の場として研究会がどのように機能したかについて考察する。最初に2年間は、研究の場としては結実しなかったが、3年目にして大きな結実を見せた。筆者は、長年臨床現場における仕事としてのかかわりだけでなく、半ば趣味のようにロールシャッハ・テストに関わってきたが、これまで研究の手段や対象と考えたことはなかった。その理由として、一人のデータを得るのに、長時間かかることと、データ分析のための処理が非常に複雑であることが挙げられる。しかしながら、研究会として機能し始めると、筆者にも、学生と一緒にデータをとって、研究をしてみたいという意欲が出てきた。

そんな折、最終年度に3名のゼミ生が（もちろん、ロールシャッハ研究会のメンバーである）が、ロールシャッハ・テストを用いて卒業研究をしたいと希望した。それに合わせて、ロールシャッハ・テストを用いた共同研究を開始した。また、それに触発された形で、筆者自身が関わった解離性同一性障害の自験例においてロールシャッハ・テストを用いたケースについて研究を始め、学会発表した（福井・飯野・福井, 2006）。本研究については、現在論文として執筆中でほぼ完成しており、近いうちに学術誌に投稿する予定である。研究会から生まれた学生との共同研究については、筆者の指導のもと100人以上にロールシャッハ・テストを実施し、それぞれ愛着との関係や、自己愛との関係、また父親図版や母親図版についての研究を進め、卒業研究として完成させた。その研究は、今年度の研究会メンバーにも引き継がれ、現在200名近くのデータが集まり、分析に取りかかっているところである。このデータベースから生まれる研究は、大学院に進学した、あるいは進学の決まっている学生と共同研究の形で進んでおり、今後順次発表予定である。このように、教員自身が興味のあることを学生と共同で研究していくという作業は、学問的に実り多いことはもちろん、学生がやる気を持って熱心に取り組む原動力にもなると思われる。何か一つのテーマに、真剣に取り組んで研究する姿を見せることは、やる気を持って自主的に努力して学んでいく姿のモデルにもなるし、学生たちも適度なプレッシャーの中で、最高のパフォーマンスを発揮することができるからである。

研究面ではゼミにおける卒業研究だけでなく、少し広がりを見せ、前述したように学生の実習体験という形で、中国人留学生のロールシャッハ反応についての研究が始まった。予備的なデータが取れた段階で、筆者が大学を去ることになったのは、大変残念であるが、このように研究会活動が活発に機能し、研究会として学部学生と共に一つの学術的なプロジェクトに取り組むことができる可能性を示し、一つのモデルを提供できたと思われる。

それ以外にも、本学付属の幼稚園における実習体験の導入や、中学や高校におけるデータ収集とその活用など、様々な活動のオプションが考えられる。これらの活動もまた、継続して進展していればさらに実り多いものになったであろう。

問題点と将来の課題

3年間の研究会活動を通して、非常に多くの成果が得られたが、同時にいくつかの問題点も見られた。第一に、他の教員や大学側の理解を得ることの困難さが挙げられる。本研究会は、セミナーの補助的な役割を果たしていたとはいえ、あくまでも筆者が立ち上げた私的なものであり、労力や時間面、資金面で苦しい点があった。合宿や他のイベントなどでは、学生にもやや負担がかかることもあったし、卒業研究が佳境に入ってくると、週に1回の研究会に出席することも難しいことがあった。

また、一部心理検査に対する偏見や誤解も見られ、そのような専門知識を学生に教える必要はないとか、むしろ危険であるなどの指摘も受けた。しかし、たとえ心理検査によって自らの問題と直面することで、苦しい思いをしたとしても、研究会の存在そのものがそれを乗り越えるための「柁」であり、一種の安全弁として機能する。青年期の発達課題は、自己同一性（アイデンティティ）の確立であるといわれている（Erickson, 1950）が、これは大変に困難な過程であり、Hall（1904）は青年期を精神的な動乱の時期であると捉えている。大学生は、心理的に危機的状況にあるといっても過言ではなく、この発達課題を克服するための「柁」の一つとして、研究会活動は寄与できると思われる。このような柁のないところでは、自己同一性の拡散が生じる可能性がある。ほどよくつまずき、乗り越えることを学ぶ場の一つとしても、研究会の存在意義はあると思われる。このようなつまずきを回避する方がむしろ危険であり、柁のないところでのアクティング・アウトを引き起こす可能性がある。

実際、何人かの学生は、研究会中に気分が悪くなったり、図版を見ることができないほど混乱したりした。筆者は前もってまたは折にふれてメンバー全員に、このような現象はときおり起こりうることで、現在解釈の対象となっている者と同じような問題を抱えていて、それと共鳴するために起こることで、個人の成長にとって欠かせない出来事であるトリフレイムしていたので、大きな混乱は起こらなかった。学生達の反応からうかがい知ることができたテーマは、アイデンティティの模索に伴う幼少期の親との関係の見直し、親離れ、自立、対人関係スキルの不足、無能感、自責感、あるいは心的外傷体験の再体験など、多様であった。また、その時期を、比較的安全に乗り越えることで、一つ自分のテーマを乗り越えることができた。

もう一つ、課題として挙げられるのは、継続性の問題である。本研究会に筆者が関わったのは3年間であったが、今後の活動については、ロールシャッハ・テストに詳しい教員がいないこともあり、教員として引き継ぎができなかった。今後の活動の継続については、学生達が研究会の活動で学んだ自主性や積極性、やる気が試されるだろう。しかしながら、筆者自身も学生だけでやっていくには、まだ完成度が低いと考えており、組織としての成熟期間として少なくとも後2年ほどは必要であると思われるが、それが得られなかったことが悔やまれてならない。

まとめ

本研究の目的は、学生の動機づけを高めるしかけを、どのようにして展開したかについて、筆者が関わったロールシャッハ研究会の3年間の活動を通して概観し、その成果について検討することであった。

上述したように、週に一度の研究会活動を通して、教員と学生あるいは学生相互間のコミュニケーションが生まれ、信頼感に支えられた人間関係が醸成された。その関係性に支えられて、一人一人の学生が活動に積極的に取り組み、学問的にも人間的にも大きく成長した。その成果も、卒業研究の質や、大学院への進学、就職、日頃の人間関係に目に見える形で現れた。

このような試みが一定の成果を上げたことは、学生の動機づけを発展させ、個人の成長を促す上で、一つのモデルとなりうると思われる。

謝辞

筆者の呼びかけに応じて、ロールシャッハ研究会での活動を共にしてくれた学生の皆様、研究会活動を温かい目で見守り、陰に陽に支えて下さった教員の皆様、このような活動の場を与えて下さった大阪国際大学に深く感謝いたします。

注記

本研究の一部は、大阪国際大学平成17年度教育研究助成課題「心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発に関する研究」の一部として実施された。

引用文献

- Erickson, E.H. 1950 *Childhood and Society*. W.W.Norton. (仁科弥生訳 1977 『幼児期と社会』、みすず書房)
- 福井義一・飯野めぐみ・福井貴子 2006 ロールシャッハ反応で見る解離性同一性障害-初回面接時と人格統合前後の比較を通して- 『第5回トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集』 70
- 福井貴子・福井義一 2006a 大学生の生活リズム(朝型-夜型)とその認知的評価がストレスとコーピングの認知に及ぼす影響. 『日本ストレスマネジメント学会第5回学術大会(京都大会)プログラム・抄録集』 54
- 福井康之 2003 女子青年のふれあい恐怖と外見恐怖. 『人間性心理学研究』 21(2), 187-197
- 福井義一 2000 中学校における構成的グループエンカウンターの効果の判定について-多次元尺度構成法を用いて-. 『日本心理学会第64回大会発表論文集』 261
- 福井義一 2001 構成的グループエンカウンターの評価について-心理的距離の変化から-. 『日本教育心理学会第43回総会発表論文集』 401
- 福井義一 2004 構成的グループエンカウンター実施前後の学級雰囲気と心理的距離の変化. 『日本教育心理学会第46回総会発表論文集』 303
- 福井義一・福井貴子 2006b 大学生の生活リズム(朝型-夜型)とその認知的評価がストレス反応に及ぼす影響. 『日本健康心理学会第19回大会論文集』 62
- 福井義一・三輪早織 2000 多次元尺度構成法を用いた構成的グループエンカウンターの評価について. 『日本教育心理学会第42回総会発表論文集』 297

国際研究論叢

- 福井義一・森津誠 2006 箱庭表現に投影される愛着スタイルに関する研究. 『日本心理臨床学会第25回大会発表論文集』 354
- Hall, S. 1904 *Adolescence*. Appleton-Century-Crofts. (元良勇次郎他訳 1910『青年期の研究』同文館)
- 石井滋・谷口淳一・加藤潤三・福井義一・柏尾真津子・柏井みずほ・青野明子・森上幸夫・小牧一裕 2006 対人関係能力向上に関する教育的実践研究－グループワーク・プログラムの開発と実施－. 『国際研究論叢 (大阪国際大学紀要)』 19(2). 75-90
- 片口安史 1987『新・心理診断法－ロールシャッハ・テストの解説と研究－』金子書房
- 喜田裕子・高木茂子 2001 学生相談から見た大学生のメンタルヘルスと心の教育－富山国際大学における過去10年間のUPI調査をもとに－『人文社会学部紀要』 1. 155-165
- Klopfer B., Ainsworth M.D., Klopfer W., & Holt R.R. 1954 *Development in the Rorschach Technique I*. Harcourt Brace Jovanovich.
- Klopfer B. & Davidson H.H. 1962 *The Rorschach Technique: An Introductory Manual*. Harcourt, Brace & World. (河合隼雄訳 1964『ロールシャッハ・テクニック入門』ダイヤモンド社)
- 栗原彬 1989 『やさしさの存在証明：制度と若者のインターフェース』新曜社
- 村上宣寛・村上千恵子 1988『なぞときロールシャッハ－ロールシャッハ・システムの案内と展望－』学芸図書
- 村上宣寛・村上千恵子 1991『ロールシャッハ・テスト－自動診断システムへの招待－』日本文化科学社
- 西村麻友子 2001 現代青年におけるふれあい恐怖的心性と自己開示. 『武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要』 3. 227-237
- 岡田努 2002 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 『性格心理学研究』 10(2). 69-84
- 小塩真司 2004『自己愛の青年心理学』ナカニシヤ出版
- 高橋雅春・北村依子 1981『ロールシャッハ診断法 I』サイエンス社
- 山田和夫 1989 境界例の周辺－サブクリニカルな問題性格群－『季刊精神療法』 15. 350-360